

地域に根ざした環境保全の取り組みに向けて ～片野鴨池保全事業を例にして～

国土環境研究所 環境計画グループ 下所 諭、幸福 智、堀 亮介

地域の自然環境は、その地域に住む人々の生活と密接に結びついています。このような地域の自然環境を保全するうえでは、行政や住民といったさまざまな立場の人々が相互理解を深めながら、地域にあった利用と保全のバランスを図っていくことが重要です。ここでは、このような「地域に根ざした環境保全の取り組み」の試行例として、石川県の片野鴨池での取り組み事例を紹介いたします。

※本業務は、環境省中部地方環境事務所が実施する国指定鳥獣保護区特別保護地区の片野鴨池の保全事業において、当社が担当している内容です。

はじめに

石川県加賀市に位置する片野鴨池は、日本有数のガン・カモ類の越冬地です(図1)。この片野鴨池は、水域と湿地及び水田からなる国指定鳥獣保護区の特別保護地区であり、ラムサール条約登録湿地でもあります。



図1 片野鴨池の位置と写真

片野鴨池は、江戸時代から周辺農地の灌漑用水池として利用され、人工的な水管理が行われてきました。夏の間は、鴨池の水を取水して周辺の水田の農業用水として利用し、稲の収穫が終わると取水をやめ、再び池に水を溜めます。こうして冬の間は開水面を拡大して、渡り鳥であるガン・カモ類の利用しやすい環境をつくってきました(図2)。

また、鴨池の周辺では坂網獵(さかあみりょう)と呼ばれる江戸時代から続けられてきた投げ網によるカモ猟が継承されています。その他、地域住民の手により、昔から池の水の管理、池の中の水田、鴨池内の草刈り・野焼き等の鴨池の環境の維持・管理が行われてきました。このように人の手が加わることで、自然環境が維持されており、里山のような環境といえます。

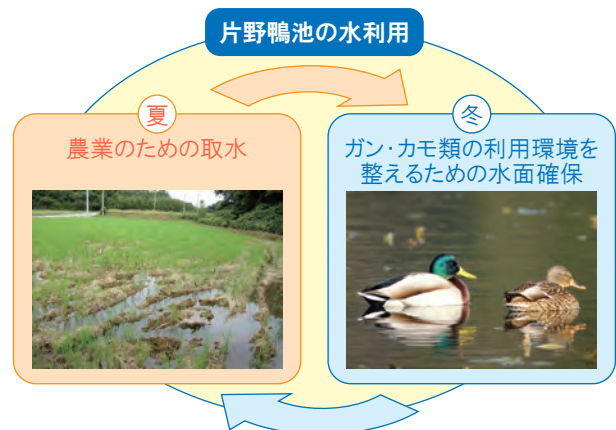


図2 片野鴨池の水利用(写真:日本野鳥の会提供)

片野鴨池の現状と保全事業

近年、片野鴨池ではカモ類の渡来数が減少しています。要因はさまざまですが、主として全国的な絶対数の変化と、片野鴨池及び周辺地域における休息や採餌といった利用環境の変化が考えられました。

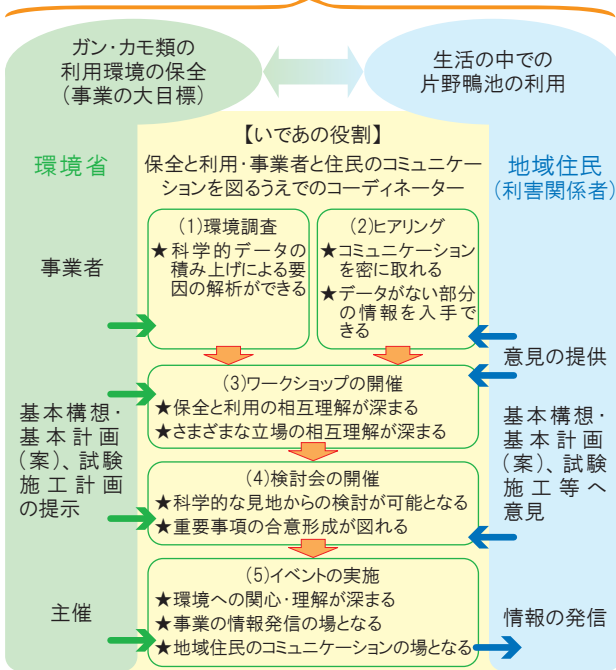
このような背景から、環境省では、ガン・カモ類の利用環境を保全するため、片野鴨池の保全事業を実施しています。ガン・カモ類の利用環境を保全するには、休息場等として機能する片野鴨池自体と、エサ場等として機能する水田を中心とした周辺環境の両方での取り組みが大切です。本保全事業では、この観点に立った検討等を行ってきました。

片野鴨池での保全の取り組み

片野鴨池保全事業において、効果的に事業を進めていくためには、片野鴨池の保全と利用のバランスを図りながら、地域との連携の中で鴨池の管理を行っていくことが重要と考えました。

保全と利用のバランスを図るためには、事業者や地域のさまざまな利害関係者の相互理解が必要であり、そのコーディネートが重要であると考えます。これらの相互理解を図るうえで、当社が片野鴨池において地域と連携しながら実施した事業の進め方を示します(図3)。

片野鴨池では、「ガン・カモ類の利用環境の保全」と「地元住民の生活の中での利用」のバランスを図りながら、持続可能な取り組みのできる仕組みづくりが重要と考えました。



コーディネートのポイント	
適切な事業内容の提案	地域のさまざまな意見を無条件に取り入れるわけではなく、事業の趣旨を理解してもらいながらより良い方向性を見いだす。
継続的な維持管理の方法の提案	地域の環境への関心を高めてもらいながら、将来的には地域が主体となった保全のあり方を引き出す。
さまざまな関係者の役割分担の提案	さまざまな立場があることを相互理解してもらいながら建設的なゴールを目指す。

図3 地域と協働で実施した取り組みのプロセス

【Step1】原因解明のための環境調査

環境の保全に係る方策を検討する際には、まず科学的なデータに基づいた、客観的な要因の解析が必要となります。そこで当社では、片野鴨池及び周辺地域における環境調査を実施し、データに基づいて片野鴨池の環境変化に関する要因解析等を行いました。

その結果、主として植生の変化に代表される、ガン・カモ類の利用環境の変化が生じていること、さらには背景として、片野鴨池及び周辺地域における高齢化や離農といった社会環境変化や、鴨池と人々の関わり方に変化が生じていることなどが明らかとなりました。

【Step2】さまざまな関係者を対象とした細やかなヒアリング

科学的なデータだけでは把握しきれない鴨池の変遷について、地域関係者を対象としたヒアリングを実施しました。ヒアリング対象者に保全事業と当社の役割を理解していただき、その関係は、その後のワークショップ、検討会まで繋がっていきます。

【Step3】相互理解を深めるためのワークショップ

今後の片野鴨池のあり方、保全の方向性についての地域の意見を吸い上げ、また、関係団体の相互理解を図るため、ワークショップを実施しました。当社はそれぞれの立場を尊重し、意見を出しやすい運営に努めました。

【Step4】合意形成を図るための検討会

専門家の先生に参加していただき、科学的な見地から検討を進めるため、検討会を開催しました。要因解析の結果やワークショップでの意見を踏まえ、今後、どのように片野鴨池を保全していくかについて、さまざまな関係者の参加のもと検討を行いました(写真1)。

その成果として片野鴨池保全事業の「基本構想」(片野鴨池の望ましい姿)、「基本計画」(片野鴨池の保全方策の枠組み)をとりまとめるとともに、地域住民の協力のもと、池の底干しをはじめとする試験施工を実施いたしました。

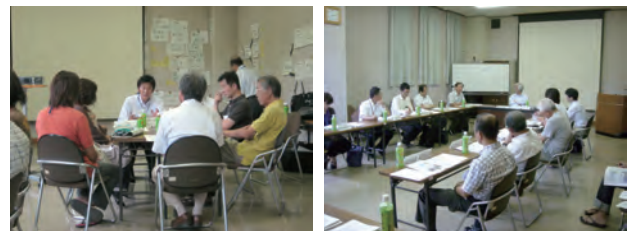


写真1 ワークショップ、検討会の開催の様子

【Step5】地域への理解を促進するためのイベント

鴨池の現状を伝え、将来的に片野鴨池の保全の取り組みの輪を広げていくことが重要と考え、住民参加イベントを開催いたしました。このイベントには170名を超える方々にお越しいただいたうえ、新聞等で報道されるなど(図4)、片野鴨池の現状について広く理解を得ることができました。



図4 掲載記事 (北陸中日新聞提供)

おわりに

今回の片野鴨池のような事業に向けて、行政と地域住民が連携しながら取り組むケースは、環境保全の新しい形となるとともに、地域の活性化に繋げることも期待できる等、事業価値を向上させる有力な手法になると考えています。

当社は、これまでワークショップや検討会の開催・運営、合意形成にあたって、コーディネーターとしてさまざまな技術と経験を蓄積してきました。今後も、このようなコーディネーターとしての役割を担うことにより地域に根ざし、持続可能な環境保全の取り組みのお手伝いをさせていただきたいと考えています。